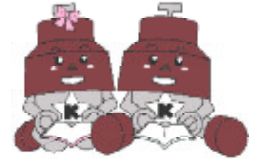




川口市立図書館 図書館だより



パソコン用ホームページ URL <http://www.kawaguchi-lib.jp/>

携帯電話用ホームページ URL <http://www.kawaguchi-lib.jp/opw1/IMD/IMDMAIN.CSP>



QRコード →

わたしの今年の一冊 2015

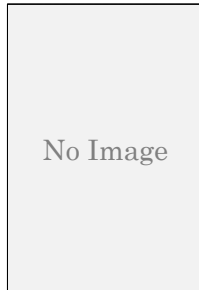
昨年お読みになった本の中で、印象に残った一冊をあげていただく「わたしの今年の一冊」は、今回で20回目となりました。たくさんのご応募をいただきましたが、紙面の関係で31点、掲載させていただきます。

「夏の光」 田村優之／著

ポプラ社 2007年刊 913.6/タ

高校生の、可能性が無限だと思えた日々がすぐひきこまれました。そして20年たって社会人となった今の話。主人公と親友とのやりとり、男の友情に心が熱くなりました。誠実に生きること、約束を守ることは、こういうことだと思いました。後半思いがけないところで涙がとまらなくなりました。何度もよみかえした一冊です。

(40代 女性)



「書店主フィクシーのものごと」

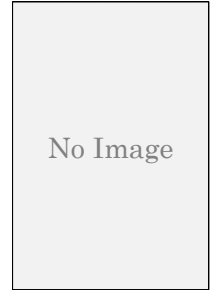
ガブリエル・ゼヴィン／著 小尾美佐／訳

早川書房 2015年刊 933.7/ゼ

島にあるたった一軒の小さな本屋が舞台。店主は妻に先立たれた少し偏屈者。この本屋に幼い女の子が置き去りにされ店主が娘として育てることにする。世話好きの島民たちが子供の世話のために本屋を訪れ、そして皆が本好きになっていく。

良い本に出会うと心豊かになる。本は人と人をつなぐ。本を読む楽しさを感じる穏やかな、やさしい物語でした。

そして各章ごとに店主が読んだ本の感想を娘に語るように書かれていて愛情を感じる面白い構成でした。(70代 女性)

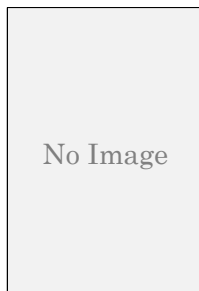


「精霊の守り人」 上橋菜穂子／著

偕成社 1996年刊 K913.6/ウ

多彩な登場人物による視点によって複眼的に物語を楽しめる。「物語を読む」醍醐味が存分に味わえる佳作だと思います。物語の最後に記されている「後悔のない人生はない」という一言にもシビれます。

子ども、若者、大人すべての世代におすすみたいと思っています。(50代 女性)



「百年法」 上・下 山田宗樹／著

角川書店 2012年刊 913.6/ヤ

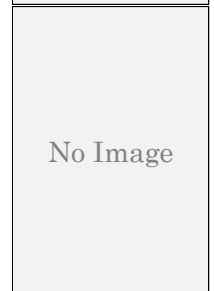
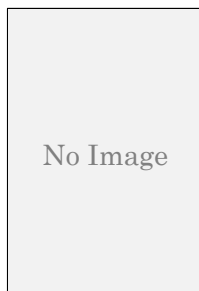
もしも、肉体は決して老いることなく、半永久的に生きる方法があるのなら、多くの人は喜んでその方法にすがりつくだろう。たとえ100年後に必ず死ぬことが条件であるとしても……。この「処置」を受け100年間死を全く感じなかった人々のいざ約束の時が迫るともっと生きたいという欲求に駆られる姿が描かれている。人類に永遠の生命は必要か否か。「死」があるから「生」を輝かせることが出来る。そう実感させられた本。(10代 男性)



「救命センターからの手紙」 浜辺祐一／著

集英社 1998年刊 916/ハ

ベテラン(著者・外科医)と研修医との会話を通して、救命救急センターでの日常や、厳しい現実が手紙の形で語られる。途中ベテランの、倫理に反する心の葛藤が垣間見えるくだりがあるのだが、非常に悩ましく人間らしい。この本は医師として、また何より人として熱い想いに溢れており、心に残った。(女性)



上下巻合わせて800ページ越えの長編だが、途中でやめることができないほど引き込まれた。百年の不老とひきかえに百年後には強制的に死ななければいけない法律・百年法。いつまでも若く美しく元気でいたいと誰もが願うが、死があるからこそ生が輝くことを、そして限りある生を大事にしたいと思わせてくれた一冊。(50代 女性)

「チーム」 堂場瞬一／著

実業之日本社 2008 年刊 913.6/ト

この本は箱根駅伝に出場する特別なチーム、「学生連合」を題材として書かれている。4年間同じ釜の飯を食べた者たちの絆(チーム)力に、寄せ集められた者たちは勝てないのか。最初から最後まで胸を熱くせずにはいられない一冊。寄せ集めのメンバーが1つの「チーム」へと成長する瞬間をご覧ください。(10代 男性)

No Image

「ふつうな私のゆるゆる作家生活」

益田ミリ／著

文藝春秋 2014 年刊 B726.1/マ

心身ともに疲れを感じていた時に、タイトルに惹かれ手にしたマンガ風なエッセイ。益田ミリさんはこう言っています。「ひとにはできないことがあってもいいんじゃないのかな。できないことや、やりたくないこと、やろうと思って失敗したこと……。できることばかりが、そのひとそのものじゃないんだ。」心に染みしました。そしてとてもラクになりました。(50代 女性)

No Image

「ハンセン病療養所」 冬敏之／著

壺中庵書房 2001 年刊 913.6/フ

ハンセン病との出会いは、今から50年ほど前にみた映画「ベン・ハー」の一場面です。それから何となく避けてきましたが、今になってしっかり受け止めたいという思いからこの本を読むことにしました。ハンセン病患者が理不尽な扱いを受けながら、療養所という名ばかりの隔離された世界で精一杯仲間を思い、愛し合い、人間らしく生きることを貫こうとする姿。そして、広い世界に出て自立しようと決心する勇気。そのために、何度も何度もつらい手術に耐え、職探しに奔走する著者。この本に出合って、二度とこんなことがあってはならないという思いと同時に、今自分の回りにある差別や偏見を改めて考えさせられました。(60代 女性)

No Image

「子や孫に読み聞かせたい論語」

安岡定子／著 幻冬舎 2011 年刊 123.8/コ

還暦を過ぎて何十年か振りに論語の本を手にした。再入門編としてこの本を選んだが、著者の書き下し文がとても丁寧でわかり易く、また、あらためて自分の人生経験と重ね合わせることができ理解が深まった。子供向けだけではなく年配の方にもお薦めの一冊。(60代 女性)

(60代 女性)

「カラフル」 森絵都／著

理論社 1998 年刊 K913.6/モ

幼い頃(小学生の時)に読んだこの作品は、今でも忘れられない。登場人物の感情の動きがこまかく描かれていて、小学生、中学生にとってもおすすめ。(年齢性別不明)

No Image

「90分でわかるアインシュタイン」

ポール・ストラザーン／著 浅見昇吾／訳

青山出版社 1999 年刊 289.3/ア

アインシュタインは世界を変え、宇宙を変えた。だが、最後には失敗者としてこの世を去って行く。アインシュタインのエピソードは、いくつもあって面白い。最高は「舌出し」あっかんべー。死ぬまでバイオリンを弾いた。アインシュタインも人間。(70代 男性)

No Image

「職業としての小説家」 村上春樹／著

スイッチ・パブリッシング 2015 年刊 914.6/ム

村上春樹の自伝的エッセイで、彼を深く理解するための百科事典のようでした。12章あるので興味がある部分から読んでも良いと思います。私共夫婦は互いの書いた文章を推敲する際、いつも喧嘩になりますが、「書きなおし」における心構え、方向性等について細かく学べる章もあり、目からうろこが落ちました。(60代 女性)

No Image

「インドクリスタル」 篠田節子／著

KADOKAWA 2014 年刊 913.6/シ

ポリュームのある本でしたが、魅了されすぐに読み終わりました。読後感も最高で、皆様にも是非お勧めしたい一冊です。今年一番のお気に入りです！(40代 男性)

No Image

大変面白かった。途上国の事情、人間の思考行動の異なりも興味深かった。(年齢性別不明)

「ま・く・ら」 柳家小三治／著

講談社 1998 年刊 B913.7/ヤ

創作落語かと勘違いするくらい読んで楽しめる内容。自分の体験談や考え方が、噺家(はなしか)を生業(なりわい)としている著者の独特な視点で表現されており、涙が出るくらい笑い転げてしまった。(60代 男性)

(60代 男性)

「世界の独裁国家がよくわかる本」

橋本五郎／監修 グループ SKIT／編著

PHP 研究所 2010 年刊 B313.8/セ

戦後70年が経過し平和が当たり前の日本ですが、世界には信じられない支配を現在でも行っている国が多数あります。新聞の国際面をにぎわす大国から、名も知らぬ国まで支配の様子を簡潔に紹介。ナチスなど過去の独裁国家も掲載あり。身体、言論の自由が保障された日本にいるありがたさを実感できる本です。(50代 男性)

「下町ロケット」 池井戸潤／著

小学館 2010 年刊 913.6/イ

TV でもとりあげられましたが、あらためて読んでみても感動できる本です 信じた事をやりとげること、好きであることがぶれない生き方につながり、いつのまにか応援している自分にきづきます。日本のロケットが大きな夢をのせて、未来へと進んで飛ぶ姿が自分の背中を押してくれます。(50代)

「にっぽん全国土偶手帖」

譽田亜紀子／著 武藤康弘／監修

世界文化社 2015 年刊 210.25/コ

地域別に掲載されていて思わず埼玉県を最初にめぐってしまったが、どこから読んでも大丈夫。全ページカラーで土偶の色の違いがはっきりとわかり、難しい専門用語もない。所属施設情報もあり、お手軽新書サイズで旅行ガイドブックのようでもある。

(50代)

「養生サバイバル」 若林理砂／著

KADOKAWA 2015 年刊 498.58/ワ

お金と時間をできるだけ節約して、健康に良いものを食べる方法が書いてあります。自炊は手間だと思っている人にぜひ読んでもらいたいです。健康は大切な資産だから。(30代 女性)

「おかしい話(ちくま文学の森5)」 安野光雅ほか／編

筑摩書房 1998 年刊 908/チ

題名のとおり、様々な作者の「おかしい話」をまとめた一冊です。どれも現実には考えられない、非常識で奇想天外で、それでいてユーモラスな作品ばかりです。もはや気持ちがいいくらいに、固定観念を壊してくれます。深く考えてはいけません。現実逃避をしたい方はぜひ読んでみて下さい。(10代 女性)

「恋歌」 朝井まかて／著

講談社 2013 年刊 913.6/フ

幕末の水戸に嫁いだ女性の一生。とても読みごたえのある本でした。水戸天狗党の乱について全く知識がなかったので、こんなひどい事があったのかと信じられない思いでした。妻の目線で書かれているので感情移入しやすく、読みやすかったです。

(40代 女性)

「富士山噴火」 高嶋哲夫／著

集英社 2015 年刊 913.6/タ

一連の自然災害パニック小説「津波」「東京大洪水」「M8」等緻密な現場取材と観察に基づいた鋭い筆致の中にホロリとさせるヒューマニティを混在させる力作は十分に評価に値すると思う。自然が吠えた時の圧倒的迫力に時間を忘れて引き込まれた。

(60代 男性)

「そして誰もいなくなった」

アガサ・クリスティー／著 青木久恵／訳 ほか

早川書房 2010 年刊 ほか B933.7/ク

登場人物が本当に誰もいなくなり非常に驚きました。最後までわからない秀逸な真相に舌を巻きました。

(20代 男性)

「ものぐさトミー」

ペーン・デュボア／文・絵 松岡享子／訳

岩波書店 1977 年刊 K933.7/テ

幼い頃大好きだったこの本を 4 歳と 7 歳の息子にわくわくしながら読みきかせました。そのものぐささも電気じかけの家も全てが想像以上のスケール。その1つ1つに驚き、クライマックスはページをめくるたびに笑いの連続。難しいことは考えずに頭の中を空っぽにして読むと家族中で幸せな笑いにつまれるそんな 1 冊です。(30代 女性)

「花嫁」 青山七恵／著

幻冬舎 2012 年刊 913.6/フ

世界一幸せな花嫁の話、ではない。彼女を迎え入れる家族の秘密の告白と言ってよいだろう。一件仲良しで互いを思いやる平和な一家はどす黒い愛の固まりを抱えていて破たん寸前。ゾクッとします。こんな家族の一員になる花嫁にも秘密があるはずで……。それも知りたいような気もするが……。いやいや、こわい！(50代 女性)

「へたな人生論より万葉集」 吉村誠／著

河出書房新社 2009 年刊 911.12/ヨ

古の人も現代の我々と同じなやみをもっていたことに感動をおぼえる。つらいことがあってもものりこえられる力をもらえた気がした。(40代 男性)

「ピンクとグレー」 加藤シゲアキ／著

角川書店 2012 年刊 913.6/カ

後半からの展開の速さに目が離せなくなる！前半の伏線がどんどん繋がっていく感じがたまりません。

(10代 女性)

「友罪」 薬丸岳／著

集英社 2013 年刊 913.6/ヤ

現代の、匿名だからできる悪意のあるネットの書き込みや、過去に犯した罪のつぐない、そして自分の友人だったらと読後に考えさせられたテーマの一冊。

(40代 女性)

「グレース」 源孝志／著

文芸社 2010 年刊 913.6/ミ

妻が遺した愛車でそのカーナビの履歴を遡る旅に出る夫。愛車・グレースの名前の由来、妻の最後のドライブ旅行の目的とは…。登場人物たちが見てきた風景が、自分の目にも見えるようでした。夫婦の互いへの想いに心温まる一冊。中盤に出てきた子どもの一言に涙しました。(30代 女性)

「オール1の落ちこぼれ、教師になる」

宮本延春／著 角川書店 2006 年刊 289.1/ミ

いつからでもやる気さえあればできる。元気が出る一冊でした。(50代)

「漁港の肉子ちゃん」 西加奈子／著

幻冬舎 2011 年刊 913.6/ニ

肉子ちゃんにとにかく号泣。なんて素晴らしい本かと感動できる。内容は読んでからのお楽しみです。(40代 女性)

「コンビニたそがれ堂」 村山早紀／著

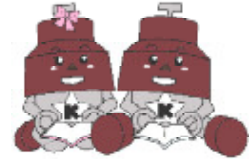
ポプラ社 2006 年刊 K913.6/ム

神社の近くにある不思議なコンビニには、行きたくても行けない。だけど行けるときは行ける。そこでは”探しもの”が必ず見つかるという。こんなコンビニが欲しいと読んだ後、誰もが願うのではないだろうか。(50代 女性)

- 「日本人のための憲法原論」小室直樹 ○「金曜のバカ」越谷オサム ○「二つの祖国」山崎豊子
○「アルジャーノンに花束を」ダニエル・キイス ○「あの家に暮らす四人の女」三浦しをん
○「長いお別れ」中島京子 ○「核の難民」佐々木英基 ○「荒野に叫ぶ声」雫石とみ
○「流れる星は生きている」藤原てい ○「リトル・ジニーときめきプラス」ミランダ・ジョーンズ
○「まじょ子のすてきなハートうらない」藤真知子 ○「天使のいる教室」宮川ひろ ○「親鸞」五木寛之
○「慟哭の谷」木村盛武 ○「掟上今日子の備忘録」西尾維新 ○「放課後の時間割」岡田淳
○「のはらクラブのちいさなおつかい」たかどのほうこ ○「花ものがたり」立原えりか ○「流」東山彰良
○「女盗賊プーラン」プーラン・デヴィ ○「桂子八十歳の腹づつみ」内海桂子 ○「告白」湊かなえ
○「時刻表昭和史」宮脇俊三 ○「シンクロシティ」川瀬七緒 ○「イブ&ローク シリーズ」J.D.ロブ
○「いとみち」越谷オサム ○「新・観光立国論」寺島実郎 ○「聖女の救済」東野圭吾
○「チェルノブイリの祈り」スベトラーナ・アレクシエービッチ ○「マスカレード・ホテル」東野圭吾
○「ロスジェネの逆襲」池井戸潤 ○「ほら男爵現代の冒険」星新一 ○「永遠の0」百田尚樹
○「はれのち、ブーケ」瀧羽麻子 ○「ある愛の詩」新堂冬樹 ○「魔女の目覚め」デボラ・ハークネ
○「流転の王妃の昭和史」愛新覚羅浩 ○「わかっているのにできない」脳」ダニエル・エイメン
○「居眠り磐音江戸双紙」佐伯泰英 ○「あなたはあなたのもままでいてください。」鈴木秀子
○「猫弁」大山淳子 ○「ほんものとの出会い」福井達雨 ○「騙されてたまるか」清水潔 …ほか

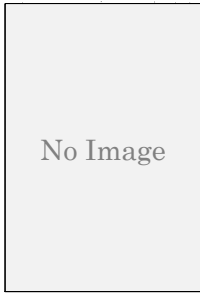
紙面の関係で、お寄せいただいたご感想や書名のすべては掲載できませんでした。
ご協力いただきました皆様、ありがとうございました。

川口市立図書館 図書館だより
**わたしの今年の一冊
(特別版)**



「わたしの今年の一冊」を掲載し始めて、20年が過ぎました。今回は特別版として過去に掲載した中から改めてご紹介させていただきます。話題になった本ばかりなので、読書の参考にしてみてください。

『ソフィーの世界』 日本放送出版
ヨースタイン・ゴルデル 949.63
私たちが当たり前と思って受け入れている物の考え方、見方などが実は長い歴史の中で多くの人たちの手を経て作りあげられてきたことを初めて確認しました。ソフィーが問われた「あなたはだれ」という問いを自分に問うことを忘れずにいたいものです。教師だった著者に教えを受けた生徒たちをうらやましく思います。
(40代女性)



1996年 掲載

『鬼道の女王-卑弥呼 上・下』 黒岩重吾
文芸春秋 913.6
この本は、卑弥呼の生きた邪馬台国を魏志倭人伝、神仙道、古事記などで、時代考証し、考古学での新発見を踏まえて、日本の古代ロマンを生き生きと描いている。心をかきたてる好読み物と思う。
(60代男性)



No Image

1997年 掲載

『五体不満足』 乙武 洋匡

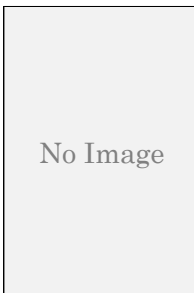
講談社 289.1

暗い内容の本だと思っていたが、何事も前向き志向で対処しているので、陰の大変さもうすれ、生存の素晴らしさを再確認させられた。読後も爽快感が残った。
(60代女性)

『うれしい気持ちの育て方』

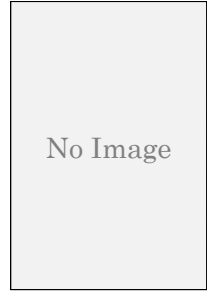
松井るり子 ほるぷ出版 019.5

元々絵本の好きな私は、この本を読んでもっともっと好きになりました。子どもに読んであげたい本もたくさん増えました。子どもが小さいうちに絶対教えておきたい一番大事なことは「生きていると楽しいよ」ということ。こんな風に子どもと接しられたら、考えられたら素敵と思える本です。子供と一緒に生きるって本当に素敵とも思えて私もうれしい気持ちになりました。
(30代女性)



No Image

1999年 掲載



No Image

2000年 掲載

『少年H 上・下』 妹尾 河童

講談社 913.6

幼年時代から中学時代。時代の波と家族愛とが描かれていて、少年の感性の鋭さとナイーブさ、友人関係、本当の友情とか、父の愛の深さとか胸を打った。
(40代女性)



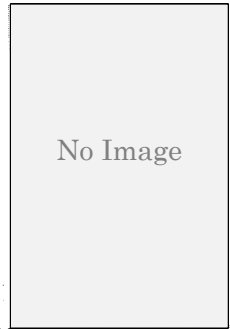
No Image

1998年 掲載

『女たちのジハード』 篠田 節子

集英社 913.6

自分の生きる道を必死で探す主人公たちをうらやましく思い、「私も何かしなくては…」と考えさせられました。
(20代女性)



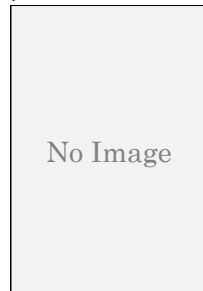
No Image

1999年 掲載

『がんばらない』 鎌田 實

集英社 498.0

精一杯がんばって、がんばって、末期をむかえた患者にとって、がんばれという言葉はとても傷つけることがあると著者(医者)は語っている。私達は、日常生活やスポーツをする時でも自分自身や人に対して、何気なくつい「がんばる」とか「もっとがんばりなさい」という言葉を発しています。そのことがプレッシャーを与えて、傷つける場合もあると、この本は教えてくれました。
(60代女性)



No Image

2003年 掲載

生きていると、この日常がずっと続くような錯覚を持ってしまいが、人は確実に老い、そして死を迎える。けれども著者のように、老いることあるいは死を迎えることすら楽しみにしてしまうような生き方をしたいと思った。

(40代女性)

No Image

2004年 掲載

No Image

2005年 掲載

『ニート』 玄田 有史

幻冬舎 367.6ゲ

昨年は、ニートという言葉が浸透し、働かず、学ばずの若者がクローズアップされた一年であった。作者は、学校を卒業して社会に出るのではなく、修学中に就労体験をさせるべきと主張する。中学で就労体験した生徒の多くは有意義であると答えており、自らも働く意義をあらためて考えなければと思った。

(30代男性)

『13歳のハローワーク』 村上 龍

幻冬舎 366.2 ム

今から2年前に刊行された本であるが、米国では13歳よりベビーシッターなどのアルバイトを始めるという。13歳から将来の職業設計をする為に、数百の職業が著者の村上龍さんとイラストレーターの、はまのゆかさんにより、懇切丁寧に紹介されている。子供から大人まで読んで楽しんで、職業を選べる。本書は中・高・大学生の必読書と言えよう。

(40代男性)

No Image

2006年 掲載

No Image

2007年 掲載

『生協の白石さん』 白石 昌則 講談社 049 シ

生協に設置してある、ひとことカードに白石さんが回答する。要望とかけはなれたくだらない質問もあるのですが、白石さんのユーモアあふれる粋な回答に思わず笑ってしまいました。どんな質問にも、素敵な言葉遣いで答えていて、その誠実さが伝わる心温まる一冊でした。こんな方が身近にいるといいですね。

(20代女性)

『はやぶさ～不死身の探査機と宇宙研の物語』 吉田 武

幻冬舎 538.9 ヨ

日本の小惑星探査機「はやぶさ」(宇宙研 JAXA ジャクサ) が直線距離3億 km(地球～太陽間の2倍、実際の行程は20億 km)を2年半かけて、極小の惑星「イトワカ」(長軸525m) に到達し、着地に成功(2005.11)した。目下、地球への帰還途上にある。このノーベル賞にも値する科学的偉業は、米国・科学専門雑誌サイエンス(2006.6.2号) に特集され、世界中の絶賛を浴びた。専門分野での成果で、知名度は低いが、中・高生に勧めたい。

(70代男性)

No Image

2007年 掲載

『天国への階段』(上・下) 白川 道

幻冬舎 913.6

個人的に、今まで読んできた本の中で一番話のあらすじの書き方が特徴的だった。様々な場面を細かに入れ換えていることで、読んでいても楽しかった。ラストは感動した。登場人物一人一人が何かしらの話題があって何回読んでも飽きないと思う。

(20代女性)

No Image

2002年 掲載